Japanese Association for Religious Studies

に、フロアからの応答も交えて、私たち自身もまた加担している「いのち」の蹂躙にどのように立ち向かえるのかについて、意義深い議論が展開された。

大震災の問う物質と霊魂
――日本仏教再評価の一環として――

代表者　戸田游晏
コメンテータ　森岡正芳
司会　實川幹朗

初期ジャイナ教の生物観――霊性を共に生きる――

杉岡　信行

ジャイナ教がアニミズム（animism）ではないことを述べることにより、ジャイナ教の生物観を浮かび上がらせたい。ヨーロッパに始まったインド学では、ジャイナ教にはアニミズム的な信仰がある（H. Jacobi、一八九五）とか、物活論的な思想がある（金倉圓照、一九四四）とかの見解がある。これに対して近年、わが国のジャイナ教研究者ら（藤永伸、一九九〇、渡辺研二、二〇〇五）から批判が提出されている。また、W. Schubring（一九六六、英訳）も、元素の微粒子が jīva 霊魂をもっており、このようなありかたをアニミズムであると認めている。ジャイナ教にはアニミズム的な信仰があるとか、元素の微粒子が、ジャイナ教でいうところの霊魂 jīva をもっているとは如何なることを指すのであろうか。ジャイナ教では生き物として六生類を規定している。最初期のジャイナ聖典『スーヤガダンガ』（一、一一、七―九）には六生類と不殺生について説かれている。「地・水・火・風、草木穀物、動物はそれぞれに生命ある生きものである。これが六生類といわれるもので、これですべてである。あらゆる手段を尽くしてこれを考察せよ。すべてが苦を憎んでいる。だからすべてを殺してはならぬ。」（谷川泰教訳、一九八八）。この言説はマハーヴィーラのものといわれている。ここにいう、生命ある生きもの、とは jīva（生命あるいは霊魂）と satta（生き物）である。すなわち、地（puḍhavī）と水（āu）と火（agaṇi）と風（vāu）と草木穀物（rukkha, sabīyaga）と動物（pāṇa）は、それぞれに jīva を有しており、まとめて六生類（chakkāya）とよばれている。また、これらの生き物は、苦を感受しそれを憎むことまでする。そして、以上は非暴力・不殺生の理由説明でもある。ところで、地、水、火、風は、インド思想では一般に元素と見なされ、物質扱いである。初期のジャイナ教に近い初期仏教では、地、水、火、風は四大種と見なされている。また、六師外道の唯物論者であるアジタ・ケーサカンバリーは、人間は四大種から成り立ち、死ぬと地、水、火、風のそれぞれの要素にかえると言う（杉岡信行、二〇〇六）。このような物質存在である地、水、火、風に、ジャイナ教ではそれぞれのこれらの中に jīva 霊魂を有していると明言してきたことを、インド学では animism であると考えてきた。ではアニミズムとはどの

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

ような内容をもった概念であろうか。animism という用語は、イギリスの民族学者である E. B. Tylor が著した *Primitive Culture*（一八七一、一九七四再版）に出てくるもので、彼の造語といわれている。タイラーはアニミズムを次のように考えていた：霊的存在者（spiritual beings）を信じることが理論であり、それらを崇拝することが実践であるような、古代から続き全世界に広まっている宗教哲学である。また、アニミズムが高度な文明領域に到達する筋道を明らかにするという、自然宗教の発達（developments）について考えていた。タイラーが考えた自然宗教の発達―宗教民族学では宗教発展段階論とか宗教進化論を指す―とは、アニミズムに始まった自然宗教が、精霊信仰から自然神崇拝や多神教に発達し、最終的に一神教に至るという考えである。さて、ここからはジャイナ教がアニミズムではないことを述べ、その生物観に言及したい。先ず最初に述べることは、ジャイナ教は創造神、絶対神を認めていないことである。したがって一神教の神がこのような神であるのなら、その対極にあるアニミズムの霊的存在者を信じるあり方も、それらを崇拝するあり方も、ジャイナ教にはない。人間を動物に含んでいる六生類は、世界（loka）に存在したし、今も存在している。地、水、火、風、草木穀物のそれぞれの身体の各々の個体に一つずつ有している霊魂は、信じる対象でもなく崇拝の対象でもなく、生類同士が共に生きるための個体の主体であろう。

バイオリージョンの視点から見た日本の風土と信仰

永原　順子

バイオリージョン（Bioregion）とは、生物域、生態域などと訳され、国境などの境界で区切られない、ある一つの山系や、河川の流域などの生態的なつながりをもつ地域のことである。このような生態系のつながりを自覚し、復元しつつ、その生態系の一部として人間の生活を見直し、持続可能な生態域を目指そうとする活動がバイオリージョナリズムである。この活動は、世界各地、もちろん日本でも、近年活発に行われている。

このバイオリージョナリズムの実践者の一人であるゲーリー・スナイダー氏（一九三〇―）は、自然と人間との関係をテーマに多くの作品を書いた自然詩人としても有名である。氏は、一九五六年から一九六八年まで日本に滞在し、相国寺や大徳寺で臨済禅を学んだ。この時期に氏は能に没頭、中でも特に「山姥」という一つの曲から感銘を受け、「山姥」を題材とした詩を書くに至る。

能「山姥」では、都の遊女一行が善光寺参りの途中、一人の老女が住む庵で一夜の宿を借りるところから話が始まる。その老女は、自らが山姥であると告白し、自らの境遇と仏法の理を説いてやがて姿を消す。山姥は能の舞台に人の形をとって現れるが、その存在が表すのは、山すなわち生態系そのものである。そして山姥の存在が「邪正一如」「色即是空」を説いている。

以上、バイオリージョナリズムの実践者の一人が日本文化に触れ、そのうちの能、特に「山姥」に共鳴した、という事実は何を示唆するのか。

NII-Electronic Library Service